

優秀賞

空屋

香川大学教育学部附属高松中学校二年 嶋村 一恵

僕は、何のために生きているのだろうか。小学生の時から考えているのに、未だに明確な答えが見つからない。そして昨日、僕は会社を首になった。つまり、生きる理由が分かっていない無職の出来上がりだ。なんて情けない響きだろう。いつそのこと自分探しの旅にでも出てしまおうか。そんな絶対に実行しないことを考えながら川原を歩いていると、看板を掲げた一軒の建物が見えた。

会社に勤めていた頃なら、どんなに目を引く外観の店だって仕事のために素通りしていたはずだ。それなのに僕はその看板からどうしても目を離せなかった。なぜなら、そこには普通なら到底ありえないはずの文字が書かれて

いたからだ。

「空屋」と。

まともな人なら「空き家」の変換ミスくらいに思うかもしれない。「くうお」と読むこともできる。しかし、仮に空き家だったとしてそれを看板に描く必要があるのだろうかという疑問が頭の隅に残った。ひよつとすると文字のままの意味で物を売っているかもしれない。真偽を確かめたい欲求を抑えられず、僕は扉を開けた。

果たして、そこは空き家ではなかったが、新たな「？」が大量に浮かんできた。例えば、何かの店であることは間違いないのだが、肝心の「何か」が分からない。謎の液体が入った瓶が大量に陳列されている。カウンターらし

きものはあるのに、店主は見当たらない。買い出しにでも行ったのだろうかと自分を納得させ、店内を見て回ろうとした瞬間、

「何かお探でしょうか？」と真後ろから声を掛けられ、思わず腰を抜かしてしまった。

「これは失礼しました。驚かせる気はなかったのですが……」

「いえこちらこそ、勝手にお邪魔してしまいすみません。」

しりもちをついたままで、自分が客であることを忘れて変なことを口走る姿がどう見えたのかは知らないが、店主（らしき人物）は僕に快く椅子を勧め、お茶まで出してくれた。

お茶を一口飲んで少し落ち着いてきた僕は、気になっていたことを彼に質問した。

「ここは何のお店ですか？」

「空です。」

「……は？」あまりにもさらりとした答えに、僕は愕然とした。

「空って…あのそらですか？」

「当然ですよ。外の看板を見てこなかったのですか？」

「どうやら本当に空を売っているらしい。いやいや、どう考えても無理がある。きつとこれは夢なんだ。楽しんでやろう。」

店を見渡すと、入口のそばの立てかけ看板が目にとまり、そこに描いていたメニューの一つに、とても興味を惹かれた。思わず店主を呼び、

「この「オーダーメイド」ってどういう意味でしょうか。」

と尋ねてみた。店主が言うには、自分の好きな場所や時間帯の空を、店主に採ってきてもらえるらしい。原理は分からないが。

「それなら、僕の故郷の空を売ってもらうこともできるんですか？」

店主は一瞬目を見開き、申し訳なさそうに首を振った。

「残念ながら、その地域は近年工業化が進んでいて、お客様の望むような空を提供することが難しいのです。」
「やっぱりか。うすうすわかっていたが、

悲しかった。うなだれていると、店主が思い出したようにこう言った。

「そういえば、その辺りをこの前訪れた時の分がまだ残っているかもしれない。ませんか。」

そう言うのと、店の奥へと探しに行った。十分ほどしただろうか。彼は戻ってきた。その手には小さな瓶が握られていた。

「お待ちせしました。ありましたよ！」
店主は埃まみれだった。僕は何度も感謝を伝えた。

そしてもちろんその空を購入し、店を後にしたところであつと、これは夢だったと気付いた。でも、もしかしたら、半ば諦めながら思いっきり頬をつねった。痛い。信じられなかった。まさかこんな絵本じみた体験を現実でするなんてと、今更ながら感動した。写真を撮っておこうと振り返ると、もう役目を果たしたと言わんばかりに、その店はあるとなく消えていた。僕は考えた。

「そうか。僕はここに来るために生きてきたんだ。なら、これからは何のた

めに生きる？その答えは、既に僕の中にあつた。

この濁った空を変えるために働くんだ。もし活動が成功して空が綺麗になったら、また空屋に出会えるかも、なんて淡い期待も抱きながら、僕は歩き出した。目の前は、光を浴びてきらきらと輝いている。

工場の煙によつて赤黒く染まった空に覆われていても、彼の目と手にした瓶は澄み切り、期待に満ち溢れていた。